

# 安心感があるから、 のびのび働ける

—プリマルーケ株式会社—

職 場  
ル ポ



取材先データ

プリマルーケ株式会社

〒859-1316 長崎県雲仙市国見町土黒己120  
TEL 0957-78-2929 FAX 0957-78-5290

keyword: 特例子会社、知的障がい、肢体不自由、食品製造・加工業、障がい理解、人材育成

● 特集 ● 特例子会社の現状

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝

POINT

- ① まずは健常者を教育し、障がい理解を促進する
- ② 人同士の相性にも気を配った職場配置を行う
- ③ 地域ぐるみでプライベートまでフォローし、長く働きたくなる環境を整える

■ 設立20年。  
定着が自慢



伊藤友博代表取締役社長

長崎県の諫早駅から、左手に有明海、右手に雲仙・普賢岳を望みながら、島原半島へ。1時間ほどで、雲仙グリーンロード沿いに「プリマルーケ株式会社」の建物が見える。1995（平成7）年に設立、翌1996年に操業を開始した「プリマハム株式会社」の特例子会社で、長崎県、国見町、社会福祉法人南高愛隣会、株式会社大光食品が出資した第三セクターの重度障害者多数雇用事業所だ。

プリマハムが現在地に特例子会社を設立したのは、当時、ハンバーグなどの加工食品の生産基地が九州になかったこと、地元企業の大光食品がプリマハムの製品を扱っていたこと、長崎県などと「長崎能力開発センター」を設立していた南高愛隣会の就労支援を受けられること、そして「知的障がい者中心の第三セクターを」との声

があったからだと聞いた。

従業員58人、そのうち障がい者は18人。スタート時から2年ほどで、従業員は倍以上に増え、今日とほぼ同じ体制になった。身体障がいの2人は事務所で、知的障がいの16人は工場で働いている。

主な加工調理食品は、当初からつくり続けているハンバーグのほかは、時代とともに変わり、鶏の唐揚げ、コンビニ向けのピザなどが主力となった後、現在はある特定の得意先向けが6割を超える。酢豚用の唐揚げ&タレのセットとハムカツを中心に、冬場は鍋用のつくねも人気がある。できあがった製品は、プリマハムの福岡の物流センターに運び、プリマハムの製品として全国で販売されている。

社長の伊藤友博さんは福岡県出身。鹿児島、熊本などのプリマハムの九州の事業所勤務が長く、3年前に現職に就いた。「うちの従業員は辞めない。これは自慢していると思います」

会社の立ちあげからかわってきた総務課課長の廣瀬洋子さんも、「設立して20年、従業員の平均勤務年数が約14年ですから、定着はいい会社だと思います」と話す。

昨年、聴覚障がいの男性1人が、定年後の再雇用を終えて65歳で退職した。この5年間の中途退職者は、てんかんを発症した社員1期生の1人のみで、会社としては熟練の技術を買ひ、雇用の継続を望んだが、高齢の両親の「いっしょに生活した



廣瀬洋子総務課課長

い」との希望で、50歳で退職したという。

採用は、職場体験実習を行い、大きな問題がなければ本格的な実習に入る。社員1期生の総務課係長の徳永順一さんが採用を担当している。

「まず就業意欲、『この会社で一生懸命働きたい』という思いをみます。一般常識、社会人としての挨拶、マナー、身の回りのことがきちんとできるか、職場のルールを理解して守れるかもポイントです。そのほか自立心、向上心があるか。『お給料をもらってこういうものを買いたい』とか、小さくてもいいので、将来の目標を持っているときいききしているし、伸びますね」

伊藤社長も、知的障がい者の働きぶりを認めている。

「障がい者も健常者も同じラインで働いていますが、障がい者は1つか2つの仕事を集中して続けると、ちゃんと仕事ができるようになります。自信をもって仕事をしていますし、まじめです。健常者より仕事ができる面もありますね」

★ 本誌では通常「障害」と表記しますが、この記事ではプリマルーケ株式会社様の要望により「障がい」としています



徳永順—総務課係長

## まずは、健常者の教育から

特例子会社なので、ハード面の整備はあたり前のこと。徳永さんと現場の2人が「障害者職業生活相談員」の資格をもつ。徳永さんは、ソフト面の充実が大事だという。「健常者への教育が一番だと思います。健常者が障がい者の特性を理解して、いっしょに働くことが目的ですので、採用面接のときに知的障がい者と同じ職場で同じ仕事をするをお話しています。その次に障がい者の教育です。パートの方とマンツーマンで仕事を覚えてもらうようになっています」

職場配置には気を配っている。「本人の意向を組みつつ、本人の特性を見きわめて、手先が器用であれば製品を選別するとか、力が強ければ運搬とか、適材適所で配置して、いいところを伸ばしていくようにしています」

人間同士、相性がうまくマッチするかも考慮する。

「障がい者も健常者も、毎日のことですから気が合うかどうかが大事です。例えば、ある程度きつくいわれても大丈夫だと思う人は、そういう人と組み合わせています。家族に障がい者がいるパートさんは、障がいへの理解があります。叱るときもほめ

るときも、とても上手な人もいます。健常者、障がい者の隔たりなく、一人ひとりとコミュニケーションをとって、みんなで頑張っているかと思っています」

廣瀬さんは、「定着の秘訣は、他所で採用されて配置されるのではなく、地元の人たちを私たちが直接面接して雇用しているからでは？」と考えている。

「社長ともう1人の出向者がいますが、工場には珍しく、派遣や外国人技能研修生はいなくて、地元の人たちを直接雇用しています。ですから、『ここで働くぞ』という気持ちがあり、愛社精神が強いのではないかと思います。パートで入っても辞めません。直接雇用は、責任感が違います。平均年齢は上がってきていますが、『経験は財産』と思つて、いまいる従業員の定着に力を入れています」

今年も、労働災害ゼロが続く。年1〜2回、小さな事故があるそうだが、どちらかといえば、省略行為※1などをしてしまつたのは健常者に多いとか。その辺は、伊藤社長も感じている。

「障がい者のほうが安全のルールを守りますね。何かあったら、きちんと報告してくれるので助かります」

## 「一般企業」として、衛生管理を徹底

プリマルケでは、衛生管理を徹底している。ISO2200※2を取得し、訪問

者は玄関で発熱していないか体温を測り、手を消毒してから建物内に入る。伊藤社長は、「一般企業に負けたくない」と話す。

「障がい者を雇用しているから」といわれたくありませんので、十分に気をつけて仕事をしています。取引先様には年数回、製造ラインを見ていただいています。「障がい者雇用をパッケージにうたつたらどうか」という話も出ますが、いろいろな考えの人がいるので、今のところ一般企業として製造しています」

工場内に入るには、まず白衣を着て、髪の毛を押さえるキャップをかぶり、さらに髪の毛がはみ出ないようにバンドで抑え、そのうえに帽子をかぶり、防塵服を着て、ローラーでゴミやチリを落とし、靴を履き替え、エアシャワーを通り、手指の消毒をし、爪も念入りに洗う。

製品は厳重な管理のもとでつくられている。例えば、磯辺揚げはちよつと端が欠けていてもクレームになるそうなので、揚げたところで選別、冷凍後にまた選別してから、袋に詰める。

レバーカツの製造ラインで、カツを並べる作業をしていた西平明日香さん（23歳）は入社してまもなく3年。高校を卒業して、「第三セクター職業訓練法人長崎能力開発センター」で2年間の訓練後に就職した。「会社見学に来て、いろいろな商品をつくっているところが、すごいと思いました。仕事は慣れました。落ち着いて仕事

※1 省略行為：作業において決められた手順を省略してしまうこと  
 ※2 ISO2200：食品関連商品の安全に関する国際基準

## WORKSHOP REPORT

長崎能力開発センター25期生の西平明日香さん。レバーカツをラインにきれいに並べる作業を担当している



箱詰めされた製品を運ぶ大久保竜治さん

ります」  
精神の障がいもあり、入社当初は不安定なときもあったとか。「最近はや安定して、頑張っています」と廣瀬さん。社長や廣瀬さんたちが大好きだという西平さんの抱負はしっかりしている。「年上のパートさ

をして、わからないことは『わかりません』といいます」  
自分がつくっている製品をグループホームで同居する人たちにごちそうした。「ハムカツや手羽の唐揚げは自分で温めました。おいしかったです」  
休日は買い物に出かけたり、ホームでゆっくりしたり、たまに親のところに帰ったり。「ポケモンも好きです。いっぱい給料をもらうために、これからも頑張



使用した器具をきれいに洗う瀬川崇さん

ん、先輩たちが定年になったとき、私たちが引き継ぐことになるので、仕事ができるようになったらと思います。いろいろなことを教えられる立派な先輩になりたいと思います。目標は40年ぐらい働きたい。結婚もしたいです」  
徳永さんは「この仕事は僕でないと、私

でないとできないという思いは強い」、廣瀬さんは「淡々と同じ仕事をしてくれる。そこがすごい」と、知的障がい者の働きぶりを評価する。工場内では、大久保竜治さん（45歳）、瀬川崇さん（42歳）、藤田和也さん（27歳）ほかの人たちが、それぞれの部署で頑張っていた。



できあがった製品を計量して、箱詰め。段取りよく仕事を進める藤田和也さん

総務部の庶務、  
物流・管理になろう

続いて事務所へ。総務部6人のうち、村中祐里さん(44歳)が庶務関係、森高淳さん(41歳)が物流、管理関係を担当している。村中さんは、入社してまもなく20年。



作業着のランドリーなど庶務関係の仕事をする村中祐里さん



総務部でパソコン、電話での営業対応をする森高淳さん

ランドリーや休日・残業などの勤怠、手袋やマスク、コピー用紙などの消耗品の管理などを行っている。脳性小児まひで手足にまひがあるが、入社後すぐに運転免許を取り、自宅から車で30分、運転してくる。趣味はパソコン組立てだ。

「会社に入って、パソコンを触っているうちに好きになりました。わからないことは友人に聞いています。アビリンピックの『パソコン組立』の競技を見に行きたいです」  
森高さんは専門学校卒業1年後、プリマルーケ設立時に入社して勤続20年になる。

「オーダーの受注関係を担当していますが、僕のところまでミスしてしまつと、後々まで関係してくるので、イージーミスなどを極力しないように気をつけています。また、ホームページ管理もしています。設備は整っていますし、みなさん協力的で、フレンドリーに接して下さるので、働きやすい環境です」

趣味は車で、いま4台目。長崎市内から1時間かけて、自慢の愛車で通勤している。「少し前までは福岡あたりまで日帰りで出かけていました。映画鑑賞が好きです」。会社人生はちょうど折り返し点。定年まで働き続けるつもりだ。

夢は、「結婚・自分の家」

諫早・雲仙地域は、社会福祉法人南高愛隣会が、「長崎障害者就業・生活支援センター」や多くのグループホームなどを運営し、就労へのバックアップ体制が手厚い。初めてグループホームを建てようとしたとき、建設予定地に反対の立て札が並んだそうだが、いまは地域の人たちがグループホームの「世話人」となり、「世話人さん会」をつくり、結婚推進室「ブーケ」もある。

「公共施設の清掃などを地道に積み重ねてきたことで、地域に理解が広がってきた。時代が変化して、障がい者が一般就労に就くようになり、障がいのある人たちも地域で受け入れられるようになりました」と徳永さん。

知的障がい者は南高愛隣会の出身者が多く、4人が自宅から、会社近くのグループホームから12人が通勤している。会社の障がい者を支援する体制も手厚く、徳永さんと廣瀬さんが設立以来担当し、地域の支援センターと月1回の定例会で情報を共有する。廣瀬さんは世話人とも密に連絡をとっている。

「世話人さんから話があったときは、必ず一つひとつ対応しています。『グループホームで感情的になったので、職場の様子を見てください』と連絡があれば、様子に

## WORKSHOP REPORT



ハムの磯辺揚げの検品作業をする堤千英子さん（48歳）。南高愛隣会のそうめん工場でご主人と結婚もして、幸せいっぱいだ

注意して『大丈夫でした』と連絡したり、会社で喧嘩をしたときは、『フォローをお願いします』と連絡したり、生活面に問題が起きたときはみんなで集まって話し合いをしたりと、一般企業では考えられないようなプライベートなところまで対応していると思います」

徳永さんは、「職場と生活が安定してないと、定着はうまくいきません。なかには、グループホームでのちよっとしたことを引きずって会社にくる人もいます。自分の業務以外にすぐく時間をとられますが、対応がうまくいったときは達成感が大きいです」

廣瀬さんは、「うちの会社では、『結婚して自分たちの家を持ちたい』という夢が多いんです。2人が結婚していますが、そのあたりの地域の支援も充実しています。私たちがあたり前にやっていることを、障がいがあってもあたり前にやっていること」

毎年、1泊の社員旅行を行っている。ほぼ九州全域を訪れて、すでに2〜3周目に入るとか。今年は3月6日・7日に熊本へ。「ほかの工場では参加率が悪くなっていますが、ここは障がい者が楽しみにしていますね」と伊藤社長。廣瀬さんたちに、旅行で「障がい者の面倒をみる」という感覚はない。「飲み忘れがないように薬を預かったりはしますが、一般企業でするので、みなさんきちんとしています。私たちより旅慣れていきますよ」。熊本名物の「馬刺し」

を食べるのを、みんな楽しみにしていた。

### 経営も職場も安定

操業開始後の2年間は仕事が少なうたいへんだったそうだが、その後少しずつ改善して、ここ7〜8年、経営は安定している。「定年まで働きたい」という西平さんの話に、社長の伊藤さんはうれしそうだった。

「国際基準のISO22000を取得していますし、HACCP※3も絡めて、安全安心な商品をお届けしたいと思います。障がい者の働く場を確保するためには、機械化が進めにくいところもあり、そういう面では大手の工場と勝負できませんが、『障がい者のまじめさ』を活用して、ひと手間ふた手間かけて、大手ができないような、『おいしい』『もう一度購入したい』と思われる商品づくりをしていきたいと思っています」

20年を振り返って、徳永さんの思いを聞いた。

「何も研修を受けずに障がい者雇用を始めたので、最初はすごくきつかったのを見ています。20年前は、まだ差別偏見がありました。健常者が平気で『バカ』とかいつていたので、それはよくないと健常者の教育を始めました。いまはすごく安定してきて、それが一番うれいですし、やってよかったと思います」

続いて、廣瀬さんの思い。

「いまは大きな声で怒ることはなく、『危ないからこうしなさい』と理由を説明するようになりました。外部の講師を呼んで、セクハラ・パワハラに関しての講習を行い、社会的スキルをあげていくように教育していますが、ここ10年くらいで、従業員の意識は高まってきていると思います」

伊藤社長は、2人の障がい者への対応が素晴らしいと評価している。

「最初からいる2人は気づかないと思いますが、私は3年前に来て、2人のスキルは高いと思いました。ちよっとまねできないと思います」

「いつでも相談できる人がいること、本人たちが相談しやすい環境をつくってあげるのが大切」とお2人。「取材を受けることを、みんなとても喜んでいきます」と廣瀬さんが教えてくれた。

本人たちが働くことに誇りを持ち、会社に誇りを持っている。「障がいのある人たちが働くのはあたり前」という地域の環境があり、本人たちもその空気を感じているからこそ、「取材があるなら出たい」と手があがるのだろう。会社と地域の理解に、20年の積み重ねを感じた取材だった。

送迎バスが17時半に出る。今日も1日おつかれさま。これからも存在感ある工場であり続けてほしい。

※3 HACCP：ハサップ。製品の安全を確保する衛生管理手法のひとつ